

福島県喜多方市
灰塚山古墳第1次発掘調査報告

辻秀人・鹿野恵美・佐々木拓哉・成田 優・服部芳治
松本尚也・森田彩加・横田竜巳・佐藤香織・星野剛史

調 査 体 制

調 査 期 間	平成 23 年 8 月 10 日～ 8 月 24 日、9 月 4 日～ 12 日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール
調 査 員	新沼裕伸・熱海泰輔・千葉優菜（4 年生） 服部芳治・吉田龍司・星野剛史・森田彩加・横田竜巳・佐々木拓哉・ 鹿野恵美・佐藤香織・成田 優・松本尚也（3 年） 川口 亮（東北大学大学院文学研究科 1 年）
調査参加者	青田花子・秋元絵里奈・石橋咲紀・上野亮太・加藤和子・今埜翔平・ 櫻田陽子・佐藤妙子・菅原綾香・高橋萌子・武田翔平・田村優衣・ 花輪玲奈・日谷 旭（2 年） 芦野 悟・岸 知宏・中島浩貴（1 年）
調 査 協 力	喜多方市教育委員会・東洋興産株式会社・ 山中雄志（喜多方市教育委員会）・片岡洋（喜多方市教育委員会） 渡辺和男（新宮区区長） 竹谷陽二郎（福島県博物館） 菅原 望（東北学院大学院生）・大谷 基・大谷静香）
土地所有者	新宮区

例 言

- 1、本書は平成 23 年 8 月 10 日～ 8 月 24 日、9 月 4 日～ 12 日実施した福島県喜多方市灰塚山古墳第 1 次発掘調査の報告書である。
- 2、調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は考古学ゼミナール所属の学生を中心とする東北学院大学文学部歴史学科の学生、考古学実習 I を履修する学生及び参加を希望した歴史学科 1 年生である。他に東北大学大学院の学生が参加した。
- 4、出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部史学科考古学ゼミナール所属の 3 年生が中心となって実施した。
- 5、本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は、調査参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆者の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示している。

序章 調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県会津地方に多くの古墳が分布することはこれまでによく知られてきた。中でも会津盆地東南部の一箕古墳群、東北部の雄国山麓古墳群、西部の宇内青津古墳群は前期の首長墓の系譜を3代以上にわたってたどることができる、有力な古墳群である（辻 2006）。調査の対象とした喜多方市灰塚山古墳は宇内青津古墳群の最も北に位置する前方後円墳である。

灰塚山古墳はこれまで、福島県立博物館によって測量調査が実施され（福島県立博物館 1987）、全長60mを越える大型前方後円墳であることが判明している。ただし、出土遺物がないため、所属時期等についての手がかりがなく、古墳の範囲も測量段階では必ずしも明確でない。

本調査は宇内青津古墳の北端の大型前方後円墳である灰塚山古墳の姿を解明することを目的として実施した。今年度の調査ではまず墳丘の姿と墳端部を確認するため、想定される主軸上に沿って前方部と後円部墳丘にトレンチを設定するとともに、墳頂部の様相を解明するために前方部、後円部墳頂の調査を合わせて実施した。今後灰塚山古墳の全体像を解明するため、継続的に調査を実施していく予定である。

引用文献（年代順）

- 福島県立博物館 1987年 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集
辻 秀人 2006年 『東北古墳研究の原点 会津大塚山古墳』新泉社



写真1 前方部墳頂調査風景

第1章 古墳の立地

第1節 古墳の位置と周辺の地形

第1節 古墳の位置と周辺の地形

灰塚山古墳は喜多方市慶徳町新宮字小山腰 2908-1 に所在する。会津盆地の西側を画する越後山地の東側の縁辺にあたる丘陵上に立地する。会津盆地の平坦地と西側山地との境界にある丘陵末端部で、周囲を解析された独立丘陵の頂上部分に古墳が築かれている。丘陵を構成する土は七折坂層で、河川の堆積物である砂層、礫を主体とし、火砕流堆積物も含まれる。七折坂層は断層が至近距離にあるため、層位が傾斜している（註1）。

第2節 歴史的環境

灰塚山古墳は会津盆地西部に分布する宇内青津古墳群註の北端に位置する大型前方後円墳である。宇内青津古墳群を構成する主な古墳は前方後円墳12基、前方後方墳3基で会津盆地の平野部から西側丘陵上まで広く分布している。最古段階は会津坂下町杵ガ森古墳、白が森古墳で、古墳時代前期でも古い段階にあたる。福島県最大の前方後円墳である亀ガ森古墳とその横に並ぶ前方後方墳、鎮守森古墳は近年いずれも前期古墳と考えられており、他に森北1号墳、雷神山1号墳、虚空蔵森古墳、出崎山3号墳、7号墳が前期古墳と考えられている。中期、後期になると古墳は減少し、わずかに長井前ノ山古墳が中期、鍛冶山4号墳が後期と考えられている。天神免古墳は前期または中期で所属時期が確定していない（第1図）。

ところで、近年喜多方市古屋敷遺跡が発掘調査の結果、中期後半の豪族居館跡であることが判明し、国の史跡に指定された。古屋敷遺跡に拠点をおいた首長の墓は当然宇内青津古墳群中にあるのが自然である。現在その候補として古屋敷遺跡に近い天神免古墳、虚空蔵森古墳、灰塚山古墳が考えられている。いずれの古墳も未調査で築造時期が確定せず、古屋敷遺跡と対応する古墳は確定していない。

なお、灰塚山古墳立地する独立丘陵は国指定史跡新宮城跡と接する位置にある。新宮城跡は中世の城館であり、中心部分はよくその姿をとどめている。その中心は14世紀にあり、15世紀まで存続したと考えられている。灰塚山古墳は新宮城から西側を見たときに、最も近い小高い丘として目に入る位置にある。灰塚山古墳の位置には新宮氏の墓所が想定されており、中世においても使われた可能性が高い。

註1 福島県立博物館竹谷陽二郎氏のご教示による。



1. 灰塚山古墳
2. 天神免古墳
3. 虚空蔵森古墳
4. 長井前ノ山古墳
5. 鍛冶山 4号墳
6. 雷神山 1号墳
7. 出崎山古墳群
8. 森北 1号墳
9. 鎮守森古墳
10. 亀ヶ森古墳
11. 白が森古墳
12. 杵が森古墳
13. 新宮城跡
14. 古屋敷遺跡

第 1 図 宇内青津古墳群分布図

第2章 発掘調査成果

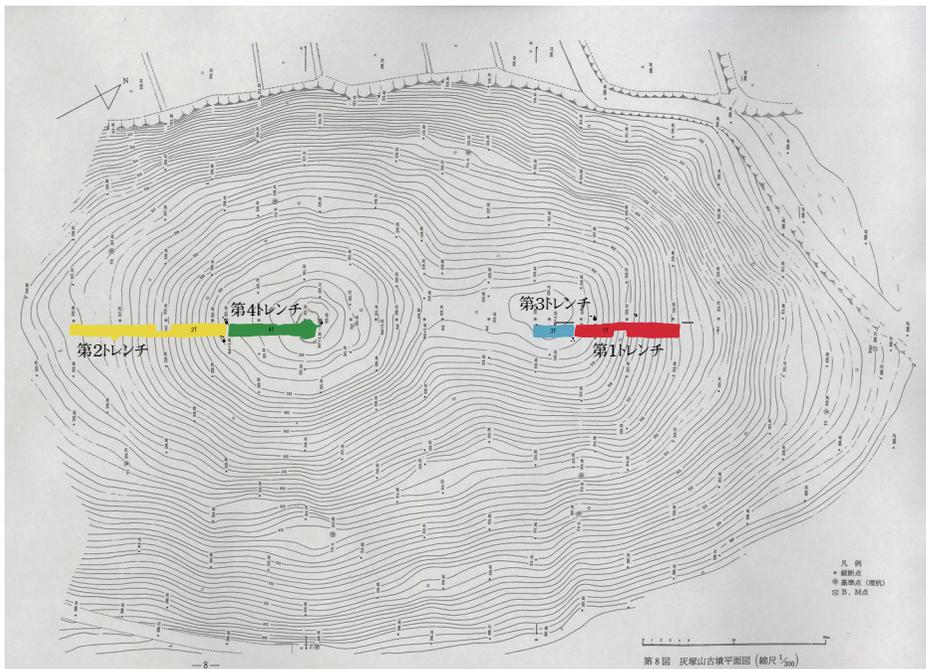
1、第1トレンチ（第3図、写真2、3）

前方部の墳丘構造を把握するとともに、墳端を確認することを目的として第1トレンチを設定した。第1トレンチは想定された主軸に沿って墳頂平坦面から墳端にかけて幅2m、長さ11mに設定した（第2図）。

トレンチ内の表土及び墳丘流出土層を掘り下げ、墳丘面を確認した。墳丘面を精査したところ、墳丘面は5枚の土層が人された。上層から、（1）黄褐色の礫混じりの層、（2）黒褐色で南端よりも大きな礫を含んだ層、（3）南端と土色は近いものの礫をあまり含まない層、（4）明赤褐色で一部オレンジ色の土が含まれた層、（5）明黄褐色で一部灰白色の土を含む層である。（1）、（2）、（3）層は礫を含むことや地山の粒子が混在するなど、人為的に動かされた様相が観察され、墳丘積み土と判断した。（4）、（5）層はシルト質で均質な層で、層の境も漸移的で、地山と判断した。従って前方部の墳丘は地山を削り出すとともに、削られた土を積み上げることで作られていることが判明した。墳丘斜面にはテラスは存在せず、前方部は一段であることが判明した。

墳端は（5）層を削り、平坦面と墳丘斜面の角度を明確に変えることで作り出されていた（写真）。墳端の位置は測量段階の想定よりもやや内側にあり、測量で求めた規模よりも実際の古墳の墳長はやや小さいと考えられた。

（森田彩加）



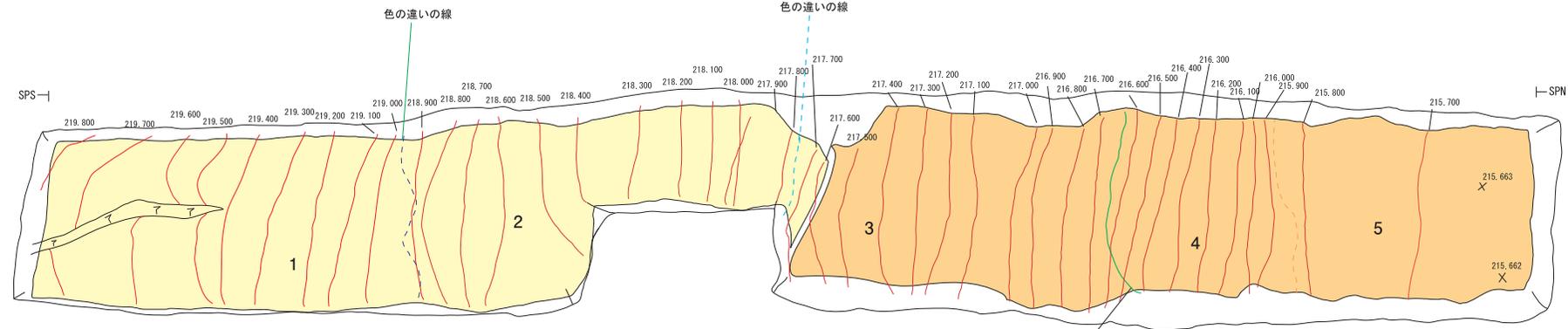
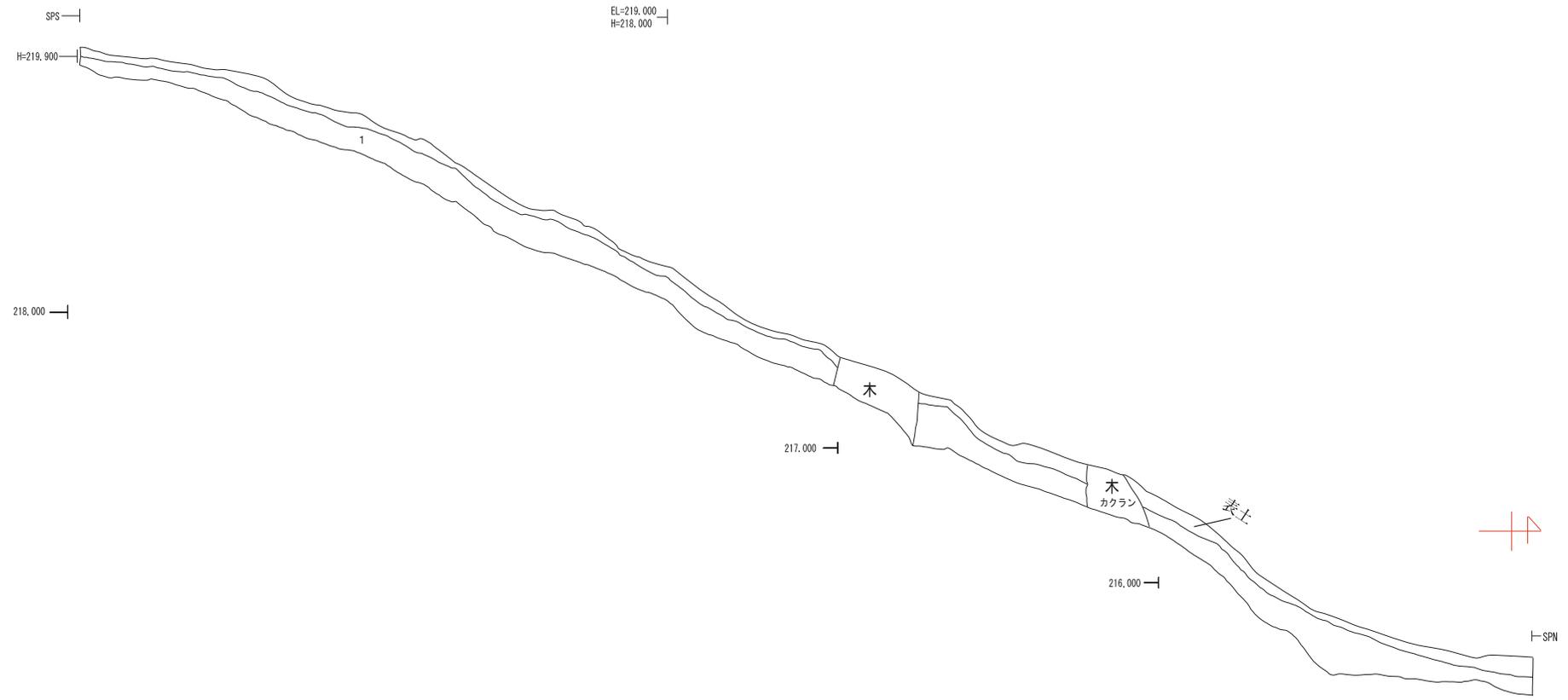
第2図 トレンチ配置図



写真2 第一トレンチ全景

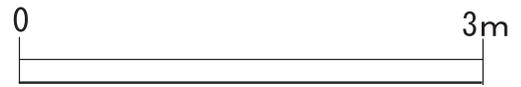


写真3 前方部墳端



1トレンチ断面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
	Hue10YR5/6 黄褐	弱	弱	シルト	表土
1	Hue2.5Y7/6 明黄褐	弱	中	シルト	



(1/60)

1トレンチ平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue2.5Y 5/4 黄褐	弱	中	シルト	礫が10%混入
2	Hue7.5YR3/2 黒褐	弱	弱	シルト	極大の礫が5%混入
3	Hue2.5Y 6/4 にぶい黄	弱	弱	シルト	一部礫が混入 Hue10YR5/6黄褐が30%混入
4	Hue5YR5/8 明赤褐	弱	弱	シルト	Hue10YR5/8浅黄橙が25%混入
5	Hue2.5Y7/6 明黄褐	弱	中	シルト	Hue5Y8/2灰白が10%混入

2、第2トレンチ（第4図 写真4～7）

後円部墳丘構造と墳端の確認のため、古墳の主軸と並行して1トレンチの延長戦上に第2トレンチを設けた。調査区は全体として、後円部の墳丘平坦面の南端より主軸に沿って長さ18m、幅1.5mで設定した。また、調査途中でトレンチの中ほどに墳丘傾斜が緩くなっているため、そこにテラスが存在する可能性も考え、その確認を途中から二つ目の目標とした。

表土と墳丘流出度を除去し、後円部墳丘面を検出した。墳丘面は後円部墳調布近から下方にのび、標高218.5m付近で一旦傾斜が緩やかになり、その下部でまた急傾斜となって墳端に至る。この緩やかな部分は幅約1mでテラスの可能性はある。ただ、テラス面と考えた場合、ゆるやかであっても傾斜があることに疑問が残り、その判断は今後の後円部の調査でこの緩やかな部分の存否が確認できるまで保留することとした。

墳丘斜面を構成する土層は標高219m付近を境に上半が黄褐色の土層、下半が均質な白色土層に分かれた。上半には礫が混じり、地山由来の粒子が混入するなど人為的に動かされた層で墳丘積み土と判断した。下半は地山である。後円部墳丘も前方部と同じく地山を削り出し、削られた土を積み上げることで作られていることが判明した。

後円部墳丘は前方部と違い比較的緩やかに墳丘外側の平坦面に移り変わっていくために墳端は必ずしも明瞭ではない。現状で判断すれば、標高217.4m付近の緩やかな斜面から平坦面に移り変わる部分が墳端と考えられる。

なお、地山の七折坂層は、会津盆地西縁を南北に走る断層に近いので、傾斜を持っている様子が観察される。(写真7) (横田竜巳)



写真4 第2トレンチ 調査風景



写真5 第二トレンチ全景



写真6 地山（七折坂層の傾き）

3、第3トレンチ（第5図、写真8、9）

前方部墳頂平坦面の様相を探索するため、第1トレンチ南側から続く主軸上にトレンチ西壁をあわせ、トレンチを設定した。

トレンチ内の表土を除去し、1トレンチとの関係調べるために1トレンチで検出した墳丘面まで掘り下げを行なった。第3トレンチ北側では第1トレンチから続く墳丘面と見られる黄色の土が確認された。この面を精査したところ、第3トレンチの中央から南側にかけての西側に土壙 (SK01) が検出された。土壙内の埋め土は礫の混じりの土で、遺物は出土しなかった。土壙は浅い皿状で、その性格は不明である。土壙は古墳築造後に掘られたと見られる。今後は前方部墳頂平坦面の全体の様相を把握するため、調査範囲を広げる必要がある。

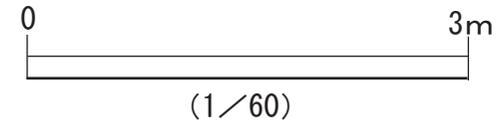
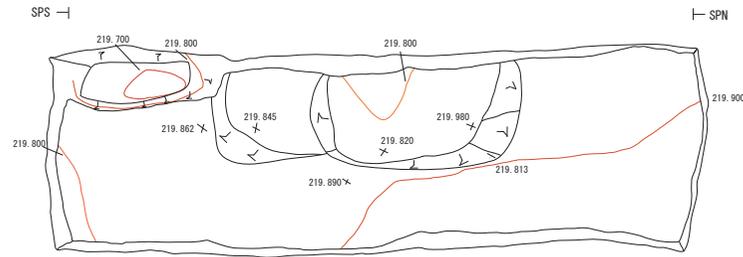
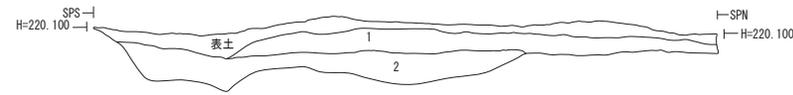
(星野剛史)



写真7 第3トレンチ全景



写真8 土壙 (SK01)



3トレンチ 断面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
	Hue2.5Y3/3暗オリーブ褐	弱	弱	シルト	表土
1	Hue2.5Y5/4黄褐	弱	中	シルト	
2	Hue2.5Y7/4浅黄	弱	中	シルト	極大の礫30%混入

3トレンチ 平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue2.5Y6/4にぶい黄	弱	弱	シルト	極大の礫30%混入

第5図 第3トレンチ平面、断面図

4、第4トレンチ（第6図 写真10, 11）

灰塚山古墳の後円部墳頂平坦面は、一般的な古墳と違って、本来ならば平坦である部分が塚状に盛り上がっていた状態になっている。塚状の盛り上がり、古墳築造時に構築されたものか後世に付加されたものかを判断することは古墳を理解する上で重要である。第4トレンチは塚状遺構の性格を追究するとともに、後円部墳頂平坦面の様相を把握するために古墳主軸にそって長さ約10メートル、幅50センチの第4トレンチを設定した。トレンチ内塚状遺構のほぼ中央部には直径1m程度の穴が掘られており、新しく掘られたと判断したため、まずこの穴の中に堆積した土を除去し、基本的な層序を確認した。

穴内部に堆積した土を除去した後、断面の清掃を行った。その結果、大量の河原石の集積を発見した。川原石の集積には土は全く混在しない状態で、人為的に積まれたものと考えられた。川原石の集積の上層には茶褐色の土層が確認された。この土層は旧表土の混じる比較的汚れた土であり、人為的に積まれたものと判断した。これらの状況から、後円部墳頂平坦面には多量の川原石と積み土からなる塚が築かれていると考えられた。古墳本来の施設とは考えられず、隣接する国史跡新宮城に関わる遺構の可能性もある。塚状遺構の性格解明は次年度以降の調査の課題である。

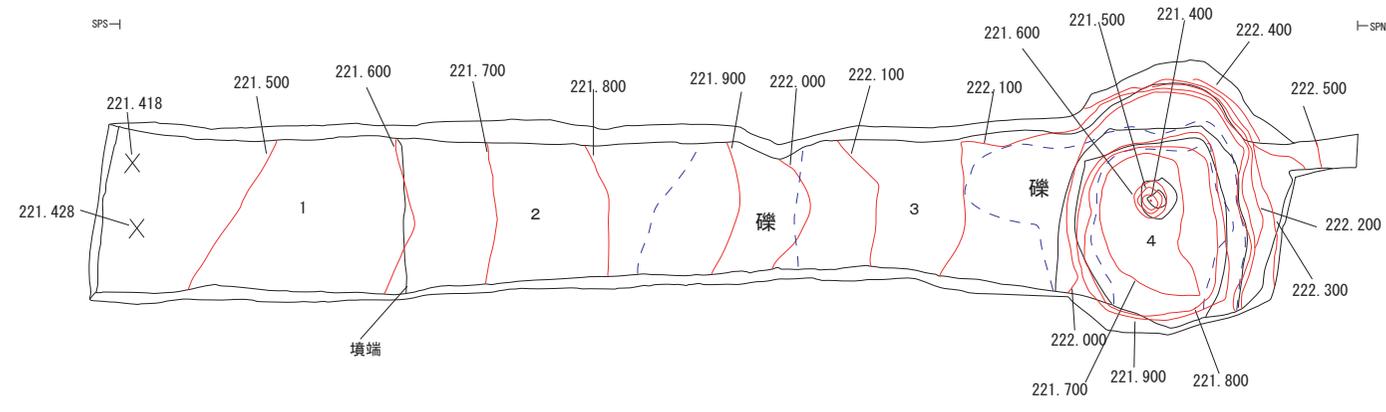
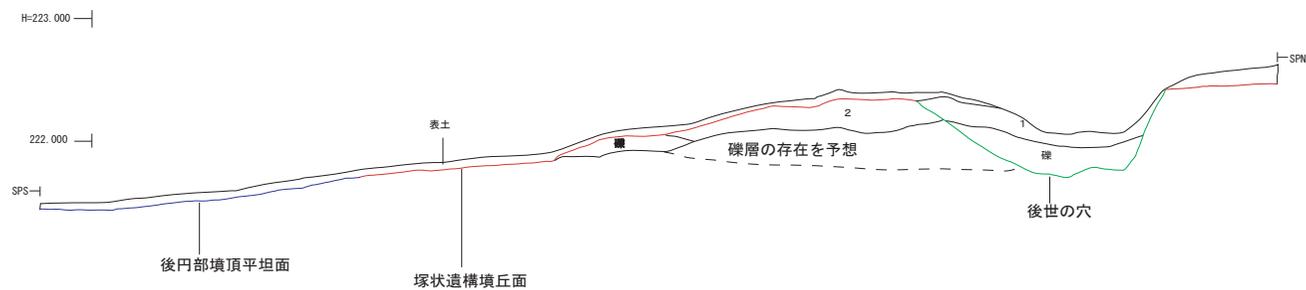
第4トレンチの南側では墳頂平坦面を検出した。墳頂平坦面を構成する土は平坦で後円部南斜面に連続的につながっていく。古墳本来の墳頂平坦面上は特に何らかの施設を設けた様子は見られなかった。
(佐々木拓哉)



写真9 第4トレンチ全景



写真10 塚状遺構断面図



4トレンチ 断面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
	Hue7.5YR3/2黒褐	弱	弱	シルト	
1	Hue10YR4/3にぶい黄褐	弱	中	シルト	極大の礫10%混入
2	Hue10YR4/4褐	弱	中	シルト	大の礫20%混入

4トレンチ 平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue10YR4/3にぶい黄褐	弱	中	シルト	極大の礫5%混入
2	極大以上の礫の層				
3	Hue10YR5/6黄褐	弱	中	シルト	
4	Hue10YR4/4褐	弱	中	シルト	極大の礫3%、中の礫10%混入

第6図 第4トレンチ平面、断面図

第3章 まとめ

喜多方市灰塚山古墳は、一箕古墳群、雄国山麓古墳群とならぶ会津盆地に分布する主要な古墳群の一つ、宇内青津古墳群内最北の大型古墳である。福島県立博物館により、測量調査が実施され（福島県立博物館 1987）、全長61.2m、後円部直径33.2m、前方部長さ27.6mの大型前方後円墳であることが判明した。

今回の調査はこれまで外形だけが判明していた灰塚山古墳の実態を発掘調査によって明らかにすることを目的として実施した。調査は今後5年程度は継続して実施し、灰塚山古墳の全体像にせまりたいと考えている。

今回の第1次調査では、古墳主軸上に前方部墳丘斜面、前方部墳頂平坦面、後円部墳頂平坦面、後円部墳丘斜面にトレンチを設定し、その様相把握に努めた。

前方部斜面では自然地形を削りだして形成した明瞭な墳端部を検出すると共に墳丘下半は自然地形のケズリだし、上半は積み土によって形成されていることが明らかになった。

前方部墳頂平坦面は調査区が狭く、全体的な様相把握には至らなかったが、浅い窪みに小礫が充填されている状況があり、古墳築造以後に利用されている可能性が考えられた。

後円部墳頂平坦面では、調査前から観察された小墳丘状の盛り上がり小礫と若干の積み土で構成されていることが判明し、経塚あるいは墳墓など中世の遺構が存在している可能性があるとして理解された。

後円部墳丘では前方部と同様に墳丘下半は自然地形のケズリだし、上半は積み土によって形成されていることが明らかになった。墳端はゆるやかに平坦面に移行するため、場所を特定には至らなかったがほぼ認識することができた。墳丘の中程に傾斜が緩やかになる部分があり、テラスの可能性が考えられたが、断定を避け今後の調査成果と総合して判断することにした。

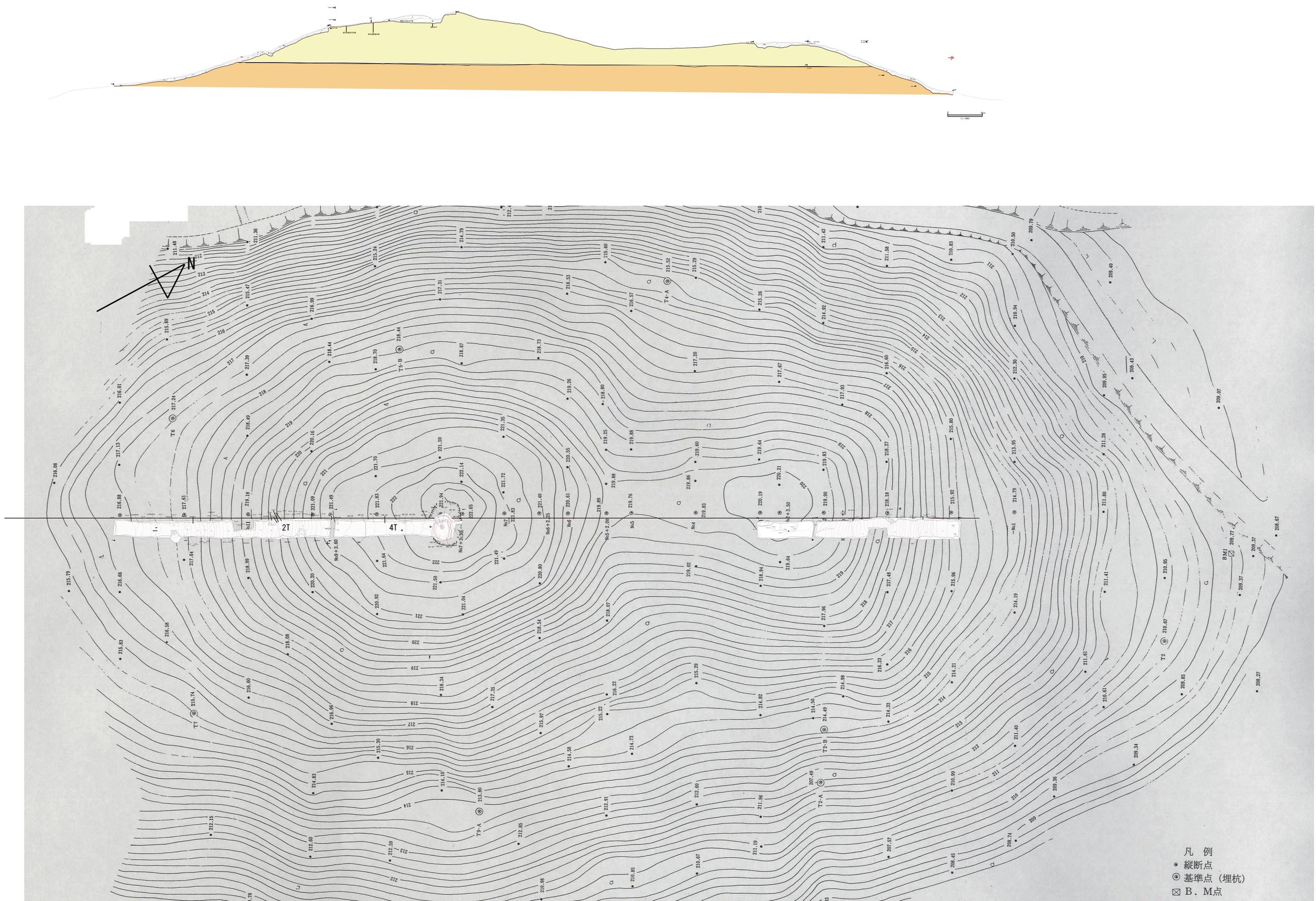
今年度は第1次調査であったため、古墳の様相把握につとめ、詳細は今後の調査で検討する予定である。なお、古墳の西側には国指定史跡新宮城跡があり、至近距離にある灰塚山古墳の上に古代中世の遺構が存在する可能性が高く、今後の調査は十分留意して勧める予定である。

引用文献

福島県立博物館 1987 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集

謝辞

灰塚山古墳の発掘調査にあたり、古墳所在地を所有されます、新宮区の区長渡辺和夫氏には調査を快諾して頂き、喜多方市教育委員会には調査に全面的に御協力いただきました。心より感謝申し上げます。また、調査の実施にあたりましては万端の手配をいただきました浪江町教育委員会山中雄志氏、片岡洋氏、宿舎を借用させていただきました矢部善兵衛氏に御礼を申し上げます。



第7図 灰塚山古墳平面、断面図